

## ハマのベースボール

まえがき

昭和五十八年六月十五日、東京銀座の交詢社で、旧横浜高商及び横浜高工の卒業生から成る三水会の昼食会にて、標題の如き卓話を致しました。その後、十月三十日、横浜山下町海岸教会の有志による「気楽に語る会」で、「ハマのベースボール」について卓話を試みましたが、話の内容において、若干趣を異にするところがあるので、テールトーク 搗き混せて、卓話というよりもランダムトーク 漫談に致しました。

前回、「英文学こぼれ話」という題でお話をしましたとき、その結びとして、「人生は、所詮、罪と罰との人間模様を描いたドラマである」と申しましたが、見方を変えますと、「人生は、戦争と平和」ということになるようです。

大正三年三月、横浜第一中学を卒業しましたとき、どこの学校へ行こう？ と一

応考えました。当時、高等学校の入学試験は九月でしたので、半年も予備校通いをした後、しかも都落して、地方の高等学校を受験するのが嫌だったので、手近の東京外語のフランス語学科を受験して、どうやら入学出来たのですが、運の悪いことには、七月に第一次世界大戦が勃発、看板教授で、唯一人のフランス人の先生ジャクレーさんが、祖国の存亡を坐視するに忍びず、突如御帰国になってしまったので、自分は、この学科に対する興味を失い、直に中退して、九月に早稲田大学文学部英文学科への転入試験を受けて、文学部の予科に入りました。当時早稲田は、予科が一年半、本科が三ヶ年でしたから、都合四年半でしたが、その結果は私にとって非常に幸でした。

編入試験の課目が英語と西洋史だったので助かりました。英語はま、あ、ま、あ、でしたが、西洋史は自分の最も好きな学課でしたので自信がありました。それは、当時斯界の権威、文学博士箕作元八先生の「西洋史講話」という本を愛読していたからです。

話が私事になりましたが、序論としてお聴き下さい。

人間の歴史というものは一国の興亡を物語る文化史で、遠いギリシアの昔から、伝説的なトロヤ戦争や、ペルシャのダリオス三世の大軍を撃退して、その捷報をアテネに齎もたらしたあの走路馬拉ソンが今日では平和の象徴になっております。象徴と申せば、ノーベル賞の授与が文化に貢献した平和の象徴ですが、皮肉なことには、液状のニトログリセリンを固形化してダ、イ、ナ、マ、イト、を発明したのが西暦一八六七年（慶応三年）で、スウェーデンの化学者アルフレッド・ノーベルでした。

昔のオリンピックでは文学芸術の分野でも争われたことは、抑々そもギリシア悲劇や彫刻の全盛期を物語っております。

今日のオリンピック競技は平和のシンボルというよりも、「衣の下の鎧」といった戦争のカムフラージュに漸々だんだんとなつて来た気がしてなりません。ヒットラーは国威を宣揚するためにオリンピックを利用しました。核兵器競争に鎬しのぎを削っている米蘇が共にオリンピックで金メダルを稼いでいます。

わが国でも昔から文武両道に秀でることを武士の誉としておりましたが、この二つを正しく使い別けることは仲々至難です。古来、柔剣道は、個人競技として、そ

の技を競う余り、お互に仇敵となり、最後は死闘を以て結着をつけるようになりました。宮本武蔵と佐々木小次郎とが対決した巖流島などは有名ですが、武蔵もこの宿敵を斃した後、悟るところがあつて、文の道に精進したようです。

西洋では「文は劔より強し」(The pen is mightier than the sword)と申しますが、これも中世の騎士道に対する戒いましめでしょう。

少年時代に、「戦ごっこ」とか「兵隊ごっこ」というのをよくやりましたが、これは確に「遊戯本能」なのでしょう。さき程お話しました私が早稲田の予科に入つて、先ず第一に英語講読で読みましたテキストは十九世紀のアメリカの哲学者ウイリアム・ジェームズの「Is life worth living?」(人生は生いき甲斐ありや)という論文でした。彼はプラグマティズム(あらゆる概念を實際的效果を標準として価値づける)の提唱者です。この論文の内容は殆んど忘れましたが、主旨は戦争というのは遊戯本能の現れであるということです。

どの国も、その国民の体位が向上すると、その活力ガアイタリテイの捌け口を軍備の拡張に振り向ける。また、不景気の時代には失業者は喜んで兵隊になる。明治大正の初期には

農村の子弟は進んで兵隊になりました。あのテレビドラマで評判のおしんが育ったような貧乏村の二男坊や三男坊は口減らしのために軍隊に入ったものです。

個人で人を殺すと罪悪だと考える人間が軍隊となると祖国のためとか、聖戦と称して戦争を美化したり礼讃します。個人競技としての拳闘や、レスリングの血まみれの死闘も、他人はこれを観て喜ぶ、戦争のカムフラージュである。昔の活動写真でチャンバラを喜んだ心理と同じです。

これに反して、ラグビーとかサッカーというのは団体競技で、チーム・ワークが信条です。特に攻守をハッキリ分けて戦う野球が今日隆盛を極めていることも成程と首肯される。

去る六月十五日に東京銀座の交詢社の昼食会で、横浜国大の前身だった横浜高商と横浜高工の卒業生から成る三水会で「浜の早慶戦」について漫談（ランダム・トーク）をしました。その時、常任幹事の方が「卓話 ハマのベースボール」という風に案内状に書いて出した。私はこの卓話という文字にいささか面喰いました。というのには「名論卓説」を直ぐ連想したからです。

そこで、卓話の語源から調べにかかった訳です。この卓話というのは、英語で *table talk* のことで、イギリス人は元来、食卓で雑談に耽ることが好きだからです。この言葉はだん／＼名士や文化人の話のことを云い、書名にまで使用されるようになりました。十九世紀のイギリスの評論家ウイリアム・ハズリットの著、テール・トークは有名です。この言葉はシェークスピアが生れてから五年目頃から使用されたと云いますから一五六九年以降ということになります。

前回御紹介しました英語の辞書を最初に造ったサミュエル・ジョンソンによると、シェークスピアのヴェニス商人の第三幕、第五場の終りの方で、あの強慾な猶太人の金貸、シャイロックの娘ジェシカが愛人ロレンゾーとの科白のやりとりの中で使用された例を挙げております。因にこの辞書は一七四七年から一七五五年まで、八年かかって完成しました。単独でこんな偉大な仕事をやったジョンソンの超人的精力には全く驚きますね。

ところで、卓話の名人と云えばこのジョンソンで、ロンドン市内のフリート・ストリートという、東京ならば、有楽町辺で、新聞社などのある街ですが、そこに彼

の行きつけの料亭、チェンジャー・チーズで、文士や政治家達と食事を共にしながら彼一流の名論卓説を披露したと伝えられています。

扱て、今申した三水会のメンバーは、昔、浜の早慶戦で、野球のライヴァルとして金港の野球ファンを二分した程の好勝負をしたものです。それで、昭和八年などはNHKのスポーツ・アナとして当時有名だった松内則三さんがネット裏から実況放送をする程でした。こうした定期戦は野球ばかりでなく、その他の競技にもあります。

明治文化の研究で有名な木村毅先生は、この研究で学位を獲られた方ですが、実に博覧強記で、ノン・フィクション・ライターとして沢山の著書がありますが、数年前に、東京のベースボール・マガジン社から「都の西北と早慶野球戦史」という本を出しております。この本は早慶戦にまつわる思い出話、特に部長の安部先生の御苦心などを紹介しております。

木村さんは私の一年先輩で、私の同窓で早大名誉教授、柳田泉君と同系統の明治文化の研究をされ、同研究会の会長を勤められました。先年お亡くなりになりました。

た。木村さんは早稲田大学創立百年史編纂には特に貢献された方ですが、「平凡」の特輯号で早稲田百人の中の一人に選ばれ、本教会の中西クレテさんの御尊父中西敬二郎先生がこの木村さんの業績を御紹介なさっております。

ここで木村さんのいうところの世界の三大定期戦について、私の調べたところを補足して御紹介しましょう。

第一はオックスフォード対ケンブリッジのボートレースです。このレースの当日は、ロンドン市内がブルーとライト・ブルーの二色で埋まる伝統的なもので、私も一九二五年の春このレースを見物しました。このレースの起源は一八二九年ですから、わが国の文政十二年に当ります。この時代には、わが国では攘夷論が盛んで、その前年一八二八年、つまり文政十一年には、あのオランダ商館の医師として来日したシーボルトが幕府の弾圧で、国外追放された年でした。その直接の原因は、幕府の天文方役人高橋景保が、伊能忠敬の作った日本国の地図をシーボルトの帰国土産に贈り、日本の科学の進歩を宣伝して貰う積りが却って仇となり、景保は捕われて獄中で死に、部下の多数が処罰されました。そしてシーボルトは二度と日本の土を踏

むことまかりならぬと永久追放になりました。

第二の定期戦はアメリカのハーヴァードとイエールのボート・レースで、起源は一八五二年、つまり嘉永五年でした。この年はわが明治天皇のお生れになった年です。その翌年、嘉永六年の六月三日は、御承知の米国東印度艦隊提督ペリーが四隻の軍艦を率いてわが浦賀に来港しました。この定期戦は、後にプリンストン大学を加えて、三校間のフットボールの定期戦となりました。

第三はわが早慶戦で、第一回は明治三十六年十一月二十一日、三田綱町の運動場で挙行され、十一対九で早稲田が破れました。

この敗戦で、早大ナインはもとより、部長の安部先生も非常に残念に思い、「若し諸君が今後、慶応をはじめ、学習院、一高等を皆破ったら、アメリカへ遠征させてやる」と選手に約束されました。これに発憤して、これらの強豪を破ってアメリカの夢を実現したのは明治三十八年で、早大野球部は部長の安部先生に引率されて、四月四日、列車で新橋から横浜へ行き、横浜から船で米国へ向いました。このとき、日本の学生野球が米国遠征するのは珍らしいといっているので、東京の女子学生の

多数が新橋駅へ見送りに来たそうです。

近頃、私は妙に月日のことが気になります。それは自分が今後何年生きられるかという不安のせいかも知れませんが、「余命幾ばくもなし」という英語は「my days are numbered.」と云います。それで日付のことが気になるのです。第一回の早慶戦は十一月二十一日と申しましたが、この日は亡父の命日であり、その二ヶ月後の一月二十一日は亡くなった家内の昇天した日です。尤も早稲田の野球部が新橋を発つて横浜から米国へ向ったのが四月四日というのも奇遇です。この日は私の誕生日です。

最近では、自分の脳のコンピューターも修理が利かなくなつて、度忘れをすることが多いのでベッドの枕もとに岩波の「日本史年表」を置いて、寝る前によく参照したりします。また、睡眠剤代りに、万葉集や芭蕉などの俳句集を手にして二、三頁を読むうちに睡気を催して来る。横文字になると、一層その効果があります。

序論はこの位にして、ここで皆様の睡気をさますために、本論に入り、ハマのベースボールの話を致しましょう。

横浜はベースボールの発祥地と云われるだけあって明治の二十年代から横浜公園球場が使用されていたようです。

横浜公園は、野毛山公園と共にハマの桜の名所で、その周囲には桜の木が沢山ありました。この樹木のお蔭で大正十二年九月一日の関東大震災の時には、下町の火災を逃れ、この公園内に避難して助かった人が沢山ありました。

この公園球場は在留外人の専用で、特に、英国人のためのクリケットと、米人の野球とに兼用されていました。それで神戸在住の米人との野球定期戦は手入れの行き届いたこの芝生のグラウンドで行われました。

第一高等学校の野球部が横浜まで遠征して、この俗称アマチア倶楽部Y C A C (Yokohama Country Athletic Club) を二十九対四の大スコアで破り、凱歌を奏して東京へ引き上げたというのは有名な話です。これは明治二十九年四月四日から数えて五十日目の出来事でした。

当時の公園球場は現在の横浜ステイディアムとは正反対の位置で、ホームベースは日本大通寄りの野外音楽堂の辺で、常盤町のY M C Aの前方に倶楽部ハウスがあ

り、英人のためのクリケットと米人のための野球に兼用され、日本人は立入り禁止、つまり「Off limit」でした。

東京から慶応や早稲田等の大学チームが来浜したのは、この素晴らしい芝生のグラウンドが魅力だったようです。今日、人工芝のグラウンドはプロの野球場に使われ、珍らしくもありませんが、当時、天然芝のグラウンドは非常に珍しかったので、特にこの球場は野球のメッカと云った感がありました。今日では、プロ野球を初め、都市対抗の社会人野球、六大学のリーグ戦、全国高校の選抜野球の甲子園等、野球の全盛時代を迎えました。

このベースボールを野球と命名したのは、明治の初期において短歌や俳句の革新運動のリーダーとなった正岡子規でした。彼は伊豫松山の人で、その郷里の松山には彼を記念する子規堂のあることは御存知でしょう。

彼は明治二十八年の日清戦争に従軍記者として戦地へ参りましたが、その時に作った短歌を一、二御紹介しますと、

(1) 従軍の首途に、  
かどで

かへらじとかけてぞちかふ梓弓

矢立たばさみ首途すわれは

(2) 従軍中、健康を書して、内地へ帰還し、須磨に病をやしないで、

夏の日のあつもり塚に涼み居て

病気なほさねばいなじとぞ思ふ

(1) は楠正行が四条畷での討死を覚悟して、如意輪堂に書き残した辞世のかへらじとの決意。矢立たばさみは従軍記者の心意気である。

(2) 子規が吐血して、戦地より帰還の後、兵庫県の須磨で療養中、敦盛塚を訪ね、自分の病気を直さね(熊谷直実)ばと心に誓った。

これは、一七五一年(宝暦元年)並木宗輔作の「一谷嫩軍記」の第二幕組打ちの場と、第三幕、「熊谷陣屋」(初代中村吉衛門の当り狂言)で有名である。

その後、子規は郷里松山に帰り、偶々親友夏目漱石が、松山中学の教頭として英語教師をしていた頃、漱石の下宿に二ヶ月程同居したことがあった。漱石の「坊っちゃん」の中にある下宿であった。「坊っちゃん」は明治四十年に出版。これより

前、明治三十八年、雑誌ホトトギスに連載したのが「吾輩は猫である」。この作品中、英語教師の苦沙彌先生が隣の落雲館中学の生徒達に野球のボールを庭内に打ち込まれて、カンカンに怒るところがあり、また、例の猫君が「吾輩は野球のことは分らぬが、中学校以上の学校ではこれが大流行ださうだ。アメリカといふ国は妙なことを考へる国ですね」とその意見を述べている。

この落雲館というのは、実は、郁文館中学のことで、漱石は明治三十六年頃、この隣に引越して来たらしい。この学校は嘗て一高を破ったことのある名門で、バッテリーの押川清（令兄押川春浪は怪奇小説家）と大橋武太郎の両名は揃って早大野球部に入った。また、この郁文館とライヴァルだった青山学院から橋戸信（後に頭鉄と号す）も早大野球部に入った。この橋戸さんは明治三十八年渡米のときの主将で、また、都市対抗野球の生みの親である。

野球部長安部先生の苦心談としては、前記早大野球部の選手に米国への遠征旅行をさせた話があるが、米人の野球コーチ、メリーフィールド氏を発見したこともその一つである。当時メリーフィールド氏は、偶々キリスト教伝道のため日本へ派遣

された青年牧師であった。同氏は元シカゴ大学の投手だった。

大正十三年、私がシカゴ大学に遊学した時には、メリーフィールド氏は同大学神学部教授でした。私は恩師高杉先生の御紹介で、メリーフィールド教授に大学内の教室でお目にかかりまして、御挨拶もそこに野球の話をしたことを覚えていきます。

安部先生の後任として野球部長になった高杉瀧蔵先生は、青森県弘前の御出身で、少年の頃東奥義塾に学び、御令兄の後を慕って渡米し、シカゴ大学で学位をとり、帰朝後、東京高等師範で教鞭をとった後、早稲田大学に転じ、英会話とラテン語の教授を担当、特に英会話は拔群で、大隈侯が海外からの賓客に対して演説される時は常に同時通訳を勤めたので有名でした。

早大野球部が夏に軽井沢で合宿練習を行った際、米国大使館員と野球試合をしたとき、同大使館員達の形勢が不利になるや、聞くに堪えぬスラングで野次り出すと、高杉部長はベンチから立ち上って流暢な英語で大使館員達を窘めた<sup>たしな</sup>という話は有名であり、また、元英語会の会員だったライジングサンの支配人某氏の告別式が当市

久保山祭場であった際、告別の弔辭が、初め日本語でしたが、感極まって、途中から英語に変わってしまったという話も亦有名です。

高杉先生は房々とした黒髪が御自慢で、御自分を万年青年 (everlasting youth) と称しておられました。古稀を過ぎて間もなくお亡くなりになったことは残念でした。

私は、早稲田では、長谷川天溪先生、会津八一先生、それに、この高杉先生の知遇を得ました。私のアメリカ遊学に際しては特に高杉先生の御厄介になりました。

私が横浜国大を定年退官した後、横須賀の神奈川歯科大学教授になりました時、偶々、高杉先生の御令息信君ましのぶにお目にかかりました。信君は当時早大理工学部の教授をなさっておりましたが、御親切にも私に非常勤講師として手伝って頂きたいと勧めて下さいました。そのとき、「貴方は亡くなった父が最も信頼していた方ですからね」と口説かれたので、二ヶ年母校に対して御礼奉公をすることになりました。ここで話を元に戻しますと、恩師高杉先生の御紹介でシカゴ大学のサマー・エキステンション (夏季大学の講座) を取りましたが、これという興味の持てる講義は

ありませんでした。それはシカゴ大学の主な教授連中は、西部の涼しい桑港や、ロサンゼルス方面へ避暑を兼ねて出張中だったためかとも思われます。それで、自分は専らシカゴのストックヤード（屠殺場）や、フィールド・ミュージアムの見学、また、プロ野球の見物に可成の時間を費しました。

シカゴにはナショナル・リーグ所属のシカゴ・カブスと、アメリカン・リーグ所属のホワイト・ソックスという有名なチームがありました。当時、シカゴ・カブス対紐育ジャイアンツの試合はわが国における阪神巨人戦のような人気カードで、この試合がある日には、たとえ市長の招待があっても辞退する者が多かつたそうです。また、ホワイト・ソックスがアメリカン・リーグ随一の紐育ヤンキーズと対戦するときには本塁打王ベープ・ルースがお目当<sup>めあて</sup>で、これ亦多数の観客を動員してしました。

野球場の風景は今日の後楽園や甲子園のそれに似ておりますが、ダブル・ヘダーとなりますと、丁度正午頃からファンが球場につめかけますので、球場の前には「ホット・ドッグ、ホット・ドッグ!!」とか、「スコア・カード、スコア・カード

!!』という売声が盛んに聞こえて来ます。スタンドに上ると、「エボナイトシート」という言葉が私の耳に異様に響きました。「エボナイトシート」というのは何だろうとちょっと変に思いましたが、つまり、「Have a nice seat!」（お座布団は如何？）ということなのでした。

ホワイト・ソックスのグラウンドである「コムスキー」球場へ行きましたとき、スタンドに上って、先ず驚いたことは、外野のフェンスのところに「no bet allowed」という文字が書いてあったことです。つまり、「賭事を禁ず」というのです。これは、何年か前に、このホワイト・ソックスが野球賭博で八百長試合をしたため、裁判沙汰となり、数ヶ月出場停止を喰った前科があるからです。この場合は有名と云っても、「famous」という言葉は使えません。当然悪名高い「notorious」ということになります。

ここで話を再び横浜公園の野球場に戻します。昭和三十二年十一月十五日に毎日新聞の横浜支局が発行しました「横浜今昔」は横浜各界の名士が昔のハマの思い出話を寄稿したのですが、その中に「東京人を笑ったハイカラさん」という題で、

作家の獅子文六、本名岩田豊雄さんがこんな風に語っています。「手入れの行き届いた芝生のグラウンドへは入れないので、その外の狭い空地で、見よう見まねで野球を楽しんでいたが、十四、五歳になると、そんな狭いところでは我慢出来ないの

で、歩いて一時間もかかる本牧の三溪園の運動場へ野球をしに行きました」と云っており、その運動場というのは、今日の根岸にある石油コンビナートに向けて開けている三の谷の芝生のグラウンドでした。私自身もこのグラウンドで練習したことがあります、打球が芝生のため速いので仲々捕球が困難だったように覚えて

います。

日露戦争直後、米国の太平洋艦隊が表敬訪問というので大挙して横浜へ来港しました。途中ハワイに寄港せず、横浜へ直行したので、乗組員は皆張り切っており、札ビラを切ったものです。米国の札は裏が緑色ですからグリーン・バックと呼ばれていました。彼等は札ビラだけでなく、金貨まで光ひけらかして豪遊しました。拾弗金貨は驚の刻印がありますので「Eagle」と俗に呼ばれていました。尤もこの拾弗金貨は一九三三年以降廃止されたそうです。

こうした豪遊は、極東の小さい島国の日本が北方の熊と異名をとったロシヤという大国を負かしたので、列国は脅威を感じたのですが、特に米国はけんせい目的もあつたのでしよう。これらの米艦には所属の野球チームがあつて、その後屢々来日して、この公園球場で、早慶をはじめY C A C等と試合をしました。ウイスコンシン、ペンシルヴェーニア、ミネソタ、ダコータ、オハイオ等というなつかしい名前が思い出されます。

明治四十一年、私の高一のとき、セミ・プロの「Reach All Americans」が来日、早慶を夫々十二対一、七対〇で破りました。早稲田の一点は捕手山脇正治君のランニング・ホウマーによるものでした。

大正二年の秋、私が神中の五年のとき、兄がその年の春に慶応の理財科に入学しましたので、兄に誘われて三田綱町の塾のグラウンドで挙行された米国本場のプロ野球というものを初めて観ました。それは慶応が招聘した紐育ジャイアンツと、これが同伴したシカゴ・ホワイト・ソックスとのエキスヒビション・ゲーム（模範試合）と塾対プロの連合軍の試合とでした。これらのプロチームはジャイアンツの名

監督マツグロウ氏に引率されて来日したのでした。是等の試合経過につきましてはここでは割愛致します。

最後に、ハマの早慶戦について簡単にお話しますと、第一回戦から三回戦までは新山下（埋立地）の球場で戦われ、高工の二勝一敗で、第四回戦は根岸の塵芥焼却場隣接の球場で挙行され、四対二で高商が雪辱し、二勝二敗となりました。この試合は七月十五日という盛夏で暑気が甚しく、しかも塵芥焼却場の隣ですから悪臭が浜風に吹き送られて閉口した上に、雲霞の如き蠅の襲来に、見物人はカン、カン、帽を以てその蠅の大群を撃退するのに大童おおわらわだった光景が、翌日の新聞に漫画となった程度でした。

丁度この第四回戦を終えた頃に、一回勝負では物足らぬので三回勝負をやったらしい案が出ましたが、意見がまとまらず、昭和四、五年は定期戦を中断しなければなりませんでした。

その頃文部省から「学生野球には入場料をとることを自粛して欲しい」という通達があり、自粛論者も出ましたが、正直に云って、野球部のお台所は入場料を取ら

なければ到底やって行けない実情でしたので、昭和六年、新装成った公園球場で定期戦が復活されました。

この第五回の定期戦は、攻守共に高商が優り、高工は連敗した。その結果、高工の藤村部長が退陣したが、その後任部長の銚衡に一頓坐をきたすに至った。そのとき校長室から電話で呼び出されて、伺いますと、「君、野球部長をやり給え」という御命令でした。私は、「教授になって未だ四年にもならない私如きがそんな大役はお引受出来ません」と再三固辞したのですが、校長の「俺がついているからやり給え」との厳命で遂に押し切られて、昭和七、八年の二年間部長をやることになりました。元来、校友会では、総務とか、野球は勅任官級の教授の引受ける役職ですから、その二ヶ年は全く針の蓆に坐らせられる思いがしました。

結局、その二ヶ年は相手高商の黄金時代でしたので、決勝戦まで持ち込みながら涙をのみました。しかし昭和八年の定期戦は、NHKの名アナウンサー松内則三さんがネット裏から実況放送をするなど最も盛り上がりを見せた定期戦でした。

この夏、私共の野球部は、韓国、満洲、北支へ初めて海外遠征を試み、七勝四敗

の成績を以て帰国しました。

私は野球部長を辞して、ホットしましたが、熱心な卒業生S君に口説き落されて籠球部長になりました。全くのロボット部長でしたが、部員一同が喜んで協力してくれたので、どうやらその責めを果たすことが出来ましたが、一方野球の定期戦のときは常に学校新聞のために戦評を書かされました。全く野球評論家といったころでした。

ここで「ハマのベースボール」にゲーム・セットを宣告することになりますが、私のような基礎学科所属の教官には学科所属の学生が一名もおりませんので、新年度における選手の補充が出来ず苦労しました。しかし顧みていい勉強をさせて貰ったと思っています。

自分が野球好きになったのは、小学校の高一のとき、恩師関根源三郎先生の「晴耕雨読」のモットーにより、「良く遊び、良く学ぶ」ことを自覚したことに始まったのだと思います。

それに早大時代の恩師高杉先生の御紹介で米国に遊学の折、先ずサン・フランシ

スコからデイライト・トレインで、夜七時頃、ロサンゼルスに到着したとき、ソウバー先生がお出迎え下され、ホテルまでタクシーでお連れ頂きましたのには全く感激しました。先生は青山学院で二十年間宣教師として御活躍になり、その頃はロスの郊外に隠棲され、御年も已に古稀を越えられた御老体でした。また、その翌日は先生のお宅にご招待下され、御家族と共に祈りに始まる基督者の敬虔な晩餐を以てはるばる、日本から来た青年の旅情をお慰め頂いたことや、羅府のメソジスト教会の牧師宗先生並びに教会員の方々の温かなお待遇は三週間の滞在を忘れ難い思い出にしてくれました。またシカゴにおける坂田祐先生との出合など、信仰に生きる人々の温情をひしひしと感じ、全く生れ変わったような歎びを味いました。

時恰も一九二〇年代は、アメリカが禁酒法を励行しておりました時代、第一次世界大戦で戦勝国となった米国は戦勝の美酒に酔い、ジャズの流行と共に、スピーク・イージーというモグリ酒場が禁酒法を嘲笑するが如く、酒の密造でブート・レックガーが横行し、正にキャポネの天下であった暗黒街は地獄の相を呈していました。こうした暗黒の世界にも、少数ながら、夜空に輝く星のような市民のあることを

知って私はホットしました。

天国と地獄とを眼のあたり見ました自分は、いつまでも存続するものは、「信仰と希望と愛」の三つであることが初めて暗示されたように思いました。

このことは、私の遊学中に学び得た最大の収穫だったと今でも信じております。